

「はしか」と「人食いバクテリア」について

現在、メディアで取り上げられている感染症に「はしか」と「人食いバクテリア」があります。

はしかは感染力が強く、人食いバクテリアは致死率が高いことから注意が必要です。今回は、2つの感染症対策についてお伝えします。

1. 「はしか」について

「はしか（麻疹）^{はしか}」とは、麻疹ウイルスに感染することにより症状を発症する病気で、現在日本だけでなく世界で流行している感染症です。

子供の病気と思われがちですが、最近は大人の感染が増加傾向にあります。

理由は、2000年以前に生まれた人は、予防接種を1回しかしていない場合が多いため、麻疹に対して十分な抗体が無い可能性があります。

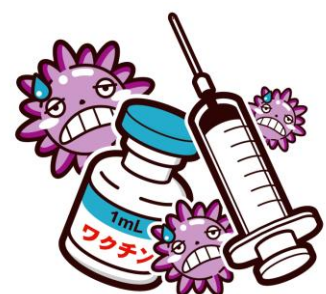
また、麻疹ワクチンの普及により全体の感染率が低下したことで幼少期に未接種者が増えたことも理由とされています。

【年代別麻疹の予防接種】

1972年以前生まれ	予防接種をしていない可能性が高い。多くの場合、自然感染で免疫を獲得していると考えられる。 感染歴がある人以外は、2回接種が推奨される。
1972年～1990年 生まれ	予防接種を1回している可能性が高い。 特例措置の非対応者であり、免疫が不十分な場合がある。 2回目の接種が推奨される。
1990年～2000年 生まれ	予防接種を1回している可能性が高い。 特例措置の対応者は、2回接種している可能性がある。 2回目を接種していない場合は、接種が推奨される。
2000年以降生まれ	2回の定期予防接種が設けられている。 2回目を接種していない場合は、接種が推奨される。

※特例措置とは

2007年に麻疹が全国で大流行したため、2008年から5年間、当時中学1年生、高校3年生（当時1990年～2000年生まれ）まで対象が拡大し、2回目を接種する機会が設けられました。



(1) 症状について

感染経過	症状
潜伏期	10~12 日程度の期間を経て症状が発症する。
カタル期 (2~3 日間)	38 度前後の発熱、コプリック班 (小さな白い斑点の湿疹) の出現、倦怠感、咳、鼻水、クシャミ、口内炎、下痢、腹痛 結膜炎 など ※最も感染力が強い時期。
発疹期 (3~4 日間)	一旦熱が下がった後再度 39 度を超える発熱に加え、全身に赤い発疹が広がる。
回復期	熱が下がり、徐々に発疹も消える。 免疫力が極度に低下しているため、他の感染症や合併症に注意が必要。

※症状が見られる間は自宅待機となり、また症状が落ち着いてもすぐに外出することは控え、職場復帰等は医師の指示に従いましょう。

(2) 対策について

①感染経路

空気感染、飛沫感染、接触感染により感染します。

感染率は 90%以上と言われ感染力の強さを表す基本再生産数は、12~18 人と言われています。

※基本再生産数とは、1 人の感染者が免疫を持っていない人にどれ程感染を広げるかを表す数字です。

(インフルエンザ 1.3~1.8 人、新型コロナ 1.4~2.5 人、風邪 6~7 人)

②感染対策

○予防接種を受けましょう。

- ・予防接種を受けていない人 (接種が強く推奨される。)
- ・予防接種を 1 回受けた人 (2 回目の接種が推奨される)

※1 回の予防接種で 9 割程度の免疫力を獲得できるが、体質等によって免疫力が低下する可能性がある。

※予防接種歴の確認は、母子手帳で確認できる。

(心配な場合は、抗体検査で抗体の有無が確認できる。)



【ワクチンの副反応について】

約 20~30%の割合で発熱、約 10%の割合で発疹が起きることがあるが、いずれも軽度であり自然治癒するといわれています。

○人込みを避けましょう。

症状を発症していない菌保持者から感染する可能性があります。

(3) 合併症について

麻疹ウイルスが別の部位に二次感染することで、合併症を引き起こします。場合によっては重症化する危険性があり、1000人に1人の割合で死亡すると言われていています。

○肺炎

麻疹ウイルスが肺に感染し、炎症が起きる状態で、発熱、激しい咳、息切れ、胸の痛み、全身の疲労感等の症状を発症します。

○脳炎

麻疹ウイルスが脳に感染し、炎症が起きている状態で、軽度では頭痛、発熱、筋肉の痛み等、重度になると身体の痺れ、歩行困難、幻覚等の症状を発症します。

はしか感染から数年経過後に発症するケースが多い傾向があります。

2. 「人食いバクテリア」について

「人食いバクテリア」とは、「劇症型溶血性連鎖球菌」を指します。

最近、メディアで取り上げられることが増え、2023年の患者数は941人（過去最多数）であり、他の感染症と比較すると感染者数は少ないものの2024年の感染ペースは増加傾向にあります。

また、感染した場合、48時間以内の致死率は30%と言われています。

(1) 症状について

症状は、急激に進行し、発症から数時間以内に呼吸不全、皮膚組織の壊死や多臓器不全を引き起こし、ショック状態に陥る危険性があります。

初期症状には発熱、急速に広がる皮膚の赤みや微熱、患部の腫れや痛み等が見られます。



(2) 対策について

①感染経路

飛沫感染や接触感染をされると考えられています。

特に、手足等の傷口から血管に入り込んで全身に広がるため、ケガ等皮膚に傷がある場合は注意が必要です。

②感染対策

○一般的な感染対策をしましょう。

手洗い、手指消毒、マスク着用が有効です。

○傷口の管理をしっかり行いましょう。(消毒、保護)

- ・ 傷がある場合は、傷口を清潔に保つ。
- ・ 傷、皮膚等にケガがある場合は、温泉やプール、川、海に入るのは避ける。
- ・ 皮膚の深い傷や感染性のある傷（膿が出ている等）は医療機関に相談する。

※原因菌である溶血性連鎖球菌は、無害な菌として人の皮膚等や体内に存在しています。

菌が突然変異することで、「人食いバクテリア（劇症型溶血性連鎖球菌）」に変化すると考えられ、現在も研究が進められています。

③予防接種について

ワクチンは現在開発中であり病気のメカニズムも研究中とされています。医療機関にかかる場合は感染症専門医がいる病院で診察を受けることが推奨され、感染が判明した場合は、医師の指示に従いましょう。

【参考】 致死率 100% 最も危険な感染症～狂犬病～

狂犬病は、犬だけでなく猫や人間等、すべての哺乳類に感染します。ウイルスを持つ哺乳類動物から引っ掻かれる等により、傷口からウイルスが侵入することで感染し、致死率は 100%とされています。

日本で狂犬病の流行は、1956 年を最後に発生はありません。しかし、近年では、野生動物が市や町の中心地に出現するケースが増えたことや年々犬の狂犬病のワクチン接種率が低下している傾向があり問題となっています。

※2024 年 2 月、群馬県で小学生含む 12 人が狂犬病ワクチン未接種の中型犬にかまれる事件がありました。

厚生労働省では、犬を飼う方への狂犬病予防接種の義務化に加え、野生動物にむやみに触れないよう注意を呼び掛けています。



※狂犬病ウイルスだけでなく、動物には様々な細菌やウイルスが存在します。野生動物だけでなく管理が行き届いた動物でも、傷口や粘膜から菌やウイルスが侵入し、体調悪化を引き起こす場合があります。